

### 3 環境情報の収集・発信

センターでは、県民に環境意識の向上や環境保全活動を支援するため、環境学習情報のほか、試験研究情報、国際貢献情報など様々な情報をホームページで提供している。平成26年7月からは、フェイスブックを活用して、イベントや生態園の四季、センターの活動などの情報も発信している。

また、新聞による環境情報の発信や、センターの活動を広く知ってもらうためにニュースレターを発行している。

HPアドレス <http://www.pref.saitama.lg.jp/cess/index.html> [平成29年度アクセス件数 141,009件]

フェイスブックページアドレス <https://www.facebook.com/saitama.kankyokagaku>

#### 3.1 ホームページのコンテンツ

##### (1) グローバルナビゲーション

トップページ上段に、以下の4つの大分類を設け、サイト構成をわかりやすく整理。

- ア センターについて 総長あいさつ、組織図、沿革、全景(航空写真)、パンフレットなどを掲載。
- イ 施設紹介 施設紹介、ご利用案内、展示館、生態園、環境情報プラザ、研修室などを掲載。
- ウ 試験研究の取組 試験研究の取組、研究課題、研究評価の取組、国際貢献、研究員紹介などを掲載。
- エ 環境学習・情報 イベントのお知らせ、彩の国環境大学、身近な環境観察局、出前講座などを掲載。

##### (2) お知らせ

特に注目して欲しい情報を掲載。

##### (3) 新着情報

最新の更新情報を掲載。

##### (4) 環境学習・イベント情報

最新のイベント情報、社会科見学の案内など環境学習に関する情報を掲載。

##### (5) 研究所トピックス

ニュースレター、センター講演会など研究所に関する情報を掲載。

##### (6) お役立ちPickUp

イベント情報、ココが知りたい埼玉の環境などアクセスの多い情報を掲載。

##### (7) リンク

刊行物、地図で見る埼玉の環境 Atlas Eco Saitamaなど。

#### 3.2 ニュースレターの発行

センターが行っている試験研究の内容や様々な講座、イベントなどの情報を県民の方々に広く情報提供するためのニュースレター(A4版・6ページ)を平成29年度は4回発行した。なお、ニュースレターは、センターのホームページからも閲覧及びダウンロードができる。

##### (1) 第35号(平成29年4月発行)

- ・ 研究・事業紹介 「「埼玉県環境科学国際センター講演会」を開催しました」  
「酸性沈着(酸性雨)の動向」
- ・ ココが知りたい埼玉の環境(26) 地下水汚染は、どのように調べているの? 自然的原因による地下水汚染ってなに?
- ・ 環境学習・イベント情報

##### (2) 第36号(平成29年7月発行)

- ・ 研究・事業紹介 「蛍光を用いた新しい水質モニタリング手法の開発」  
「生態園内の放射性物質の分布や蓄積状況の実態調査」
- ・ ココが知りたい埼玉の環境(27) 埼玉県の夏の天候はどうなっているの? 熱中症の現状はどうなっているの?
- ・ 環境学習・イベント情報

##### (3) 第37号(平成29年11月発行)

- ・ 研究・事業紹介 「スーパーコンピュータで切り拓く廃棄物(ごみ)の研究」  
「埼玉県における地中熱エネルギー活用に向けた研究」
- ・ ココが知りたい埼玉の環境(28) 富士山で空気を調べると何が分かるの? 富士山の空気はどこが違うの?
- ・ 環境学習・イベント情報

(4) 第38号(平成30年1月発行)

- ・ 研究・事業紹介 「埼玉県の暑さ対策のための調査・研究」  
「埼玉県における絶滅危惧植物の分布と保全」  
「第7回日中水環境技術交流会」
- ・ ココが知りたい埼玉の環境(29) 環境基準、排水基準にはそれぞれどんな意味があるの？
- ・ 環境学習・イベント情報

3.3 センター講演会

当センターでは、広く県民に活動内容及び研究成果を紹介することにより、県民のセンターに対する理解と環境問題への関心を深めることを目的として「平成29年度環境科学国際センター講演会」を平成30年2月2日に埼玉会館(さいたま市浦和区)で開催した。「守ろう 創ろう 未来の環境～持続可能な社会とは～」をテーマとして、国立環境研究所の亀山康子副センター長が基調講演を行うとともに、センター研究員による研究成果・事例の発表及び研究活動紹介のポスター展示と解説を行った。センター講演会の参加者は249名であった。

(1) 基調講演

持続可能な社会を目指して

～今、私達にできること～……………国立環境研究所 副センター長 亀山 康子

「持続可能な発展」や「持続可能性」といった言葉は、漠然としてよく分からない、自分の生活には関係なさそうな概念という印象を持つことが多い。この講演では、「持続可能な発展」という言葉が誕生した頃に想定されていた意味を説明し、それが近年にかけてどのように進化を遂げてきたか、国際社会の動向を踏まえた「持続可能な発展」の概念を紹介した。また、今や、日本に住む私たちにとっても、これが目指すべき目標となっており、環境面の目標にとどまらず、人口減少社会や女性参画社会などの複数のゴールを同時に達成することが求められている。政府に持続可能な開発目標(SDGs)の実施をすべて任せるのではなく、地域社会で、そして個人個人で実施に向けたアイデアを出していくことが求められていることを紹介した。

(2) センターの研究成果・事例紹介

産業廃棄物処理に伴う化学物質の流れ

～焼却処理による重金属等のゆくえ～……………研究推進室 副室長 渡辺 洋一

産業廃棄物に含まれる化学物質は、焼却処理されると環境中へ排出されるとともに、燃え殻などに含まれて移動する。化学物質の排出量を把握することは、化学物質を管理する上で重要であるが、焼却処理施設では排出量の推計が困難であり、推計手法の確立が重要な課題となっている。そこで、研究によりわかった産業廃棄物の焼却処理に伴う化学物質の流れと大気排出量の推計手法について紹介した。

増加したニホンジカによる森林被害の現状とその管理を巡る課題

～秩父地域を事例として～……………自然環境担当 主任 角田 裕志

埼玉県においても近年シカの分布域が拡大しており、シカが増えることによって起こる様々な問題の中で、特に森林に与える影響について秩父地域の事例を紹介した。また、その対策として行われているシカの個体数管理の現状から、人間とシカとの共存に向けた今後の課題について考えた。

県内河川における細菌の分布と水質との関係

～目に見えない生き物は何をしているのか～……………水環境担当 主任 渡邊 圭司

河川における細菌は、汚濁原因物質の取込みや分解などに寄与し、それ自身は動物プランクトンのエサ資源となり、食物連鎖の中で大切な役割を担っている。しかし、河川における細菌の研究の歴史は比較的浅く、まだ分からないことが多いのが現状であり、県内河川における細菌の分布状況及び汚濁原因物質の循環への寄与について報告した。

(3) センターの活動紹介

各担当がその活動概要を紹介するポスターを展示し、参加者に説明するとともに、質問に答えた。



基調講演



ポスター展示

### 3.4 環境情報の提供

#### (1) モニタリングデータの提供 (CO<sub>2</sub>)

環境科学国際センターは、さいたま市(1991～2000年度)、堂平山(1992年度～)及び当センター(2000年度～)において、地球温暖化原因物質である大気中のCO<sub>2</sub>の濃度を観測してきた。測定に当たっては、世界気象機関標準ガスを基準としており、観測データについては、温室効果ガス世界資料センター(WDCGG)へ提供することにより、国連世界気象観測機構(WMO)の観測網を通して世界各地に供給した。平成21年10月からは、当センターの観測結果(速報値)をセンターホームページに掲載(自動更新)し、公開している。

#### (2) 環境情報の海外への発信

ホームページに英語版、中国語版のパンフレットを掲載するとともに、英語版ホームページにより研究成果や研究員紹介などを掲載し、海外に向けた情報発信を行った。

### 3.5 マスコミ報道

センターの試験研究、環境学習等に関して記者発表を行ったほか、取材を受ける等の結果、以下のとおりマスコミによる報道があった。

#### (1) 新聞報道、広報誌掲載

(32回)

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内容
2017. 4. 7	日本経済新聞	サブミクロン粒子「PM1」1時間単位でデータ測定 大気汚染対策に生かす	県環境科学国際センターは、4月から大気中の微小粒子状物質「PM2.5」に含まれるサブミクロン粒子「PM1」の1時間単位の測定を始めた。国や自治体として全国初の試み。PM2.5の濃度が高まる時に工場排ガスなど人為的な粒子がどの程度影響しているかを把握し、発生抑制の施策に生かせるようデータを集めたいとしている。
2017. 4. 9	読売新聞	シカ食害 変わる山野 生息数減少へ県対策	シカの増加によりヒノキ苗の食害などが発生し、奥秩父の山吹谷県有林では林床が裸地化し、土壌流出が始まっている。県環境科学国際センターの角田研究員が記者に同行し、解説した。被害は農林業にとどまらず列車接触事故も多発しており、県は3000頭を年間捕獲目標にして生息数を減らす計画。
2017. 4.24	朝日新聞	荒川遡上のアユ 取水堰で見学会	荒川の秋ヶ瀬取水堰(志木市)で21、22両日、稚アユの遡上見学会があった。市民や県、東京都の水道関係者ら約50人が参加。県環境科学国際センターの金澤光によると「荒川のアユは毎年10～11月に鴻巣から寄居町あたりで産卵。河口に近い汽水域で越冬し、3月から6月頃に遡上する」とコメントした。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内容
2017. 5.10	埼玉新聞	次世代車試乗 静かさに驚き	水素で走る次世代の燃料電池自動車、トヨタのミライとホンダのクラリティフューエルセルの試乗会が県環境科学国際センターで開かれた。水素エネルギーの普及を図り、水素社会の実現を目指すねらいで、県が公用車として所有する水素自動車を展示し、約130人が試乗した。
2017. 6. 5	埼玉新聞	綾瀬川 アユ遡上好調 岩槻区 調査で54尾 最大の成果	さいたま市岩槻区加倉の綾瀬川で、県の専門家とNPOエコロジー夢企画によるアユの遡上調査が3日、行われた。午前10時から午後5時までの調査でアユ54尾を捕まえた。調査を指導した県環境科学国際センター金澤光は「大漁だ。今年は東京湾からの遡上綾瀬川で好調だったことの証拠。魚体も昨年よりひと回り大きい」とコメント。
2017. 6. 7	産経新聞	女性研究者の働き方 改革 県が埼玉大と連携 環境改善へ意見交換	女性研究者の「働き方改革」を推進するため、県は埼玉大と連携することを発表した。研究機関では女性研究者の働き方改革が他の業種よりも遅れているとされ、県環境科学国際センターなど県の5研究機関と埼玉大で女性研究者の交流の場を増やすことで課題の解消につなげる。
2017. 6. 7	日本経済新聞	女性研究者 活躍後押し 埼玉大など ネットワーク構築	埼玉大学と埼玉県の5研究機関(県環境科学国際センターなど)は、女性研究者ネットワークを構築するための覚書を締結した。女性研究者の交流や女子学生のインターンシップなどを進め、女性研究者が活躍しやすい環境づくりに取り組む。
2017. 6. 7	埼玉新聞	女性研究者 活躍支援へ 県5研究機関埼玉大と 連携 経済の活性化図る	県は、女性研究者が活躍しやすい環境づくりに取り組むため、埼玉大学と県の5研究機関(県環境科学国際センターなど)が連携する「女性研究者ネットワーク構築」の覚書を締結した。女性が活躍することで経済の活性化を図る「埼玉版ウーマノミクスプロジェクト」の一環。
2017. 6. 9	読売新聞	女性研究者活躍へ交流を 県と埼玉大 80人のネットワーク	女性研究者の活躍を推進しようと、県と埼玉大は、県の5つの研究機関(県環境科学国際センターなど)と同大に所属する女性研究者約80人の交流を促すネットワークをつくった。職場や研究分野の垣根を越えて働き方を見直し、他分野の知識を研究に生かすといった効果を狙う。
2017. 6.19	埼玉新聞	伊奈・綾瀬川で遡上調査 アユはゼロ ボラを発見 珍しいビワヒガイも確認	伊奈町の綾瀬川でNPOエコロジー夢企画が主催しアユの遡上調査が行われた。アユは1匹も見つからず空振りに終わった。調査を指導した県環境科学国際センター金澤は「ボラが見つかったことは海とつながっている証拠。アユは見つからなかったが、大橋井堰の水門が閉まる前に遡上したアユが相当いる」と今後に期待を寄せた。
2017. 8.15	日本経済新聞	PM2.5 昼夜別に観測 県環境科学国際センター 富士山頂で	県環境科学国際センターは、自治体の研究所として唯一、富士山頂の大气調査を2010年から行っており、今年も7月～8月の期間に微小粒子状物質「PM2.5」を昼夜別に観測する調査を始めた。これにより中国などからの越境汚染の状況をより詳細に把握する。加須市にある同センターの観測データとも照合し、県内への影響も確認する。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内容
2017. 8.23	毎日新聞	彩の国環境大学受講 生を募集中 25日まで	県環境科学国際センターでは、26日に研修室で彩の国環境大学の公開講座を開催する。テーマは、「古くて新しい光化学スモグー原因、発生機構、新たな対策」で、同センターの畠山総長が講演する。参加費無料。申込は25日までに同センターへ。
2017. 9. 6	読売新聞	海外でリサイクル研究 埼玉大、ベトナムに協 力 技術提供や人材育成	埼玉大は、ベトナムの建設廃棄物のリサイクル技術を向上させるため、現地の大学などと協力して、2018年から5年間、技術提供や人材育成などの研究に取り組む。政府開発援助(ODA)などで資金的支援を受ける。国立環境研究所や県環境科学国際センターも協力し、建設廃棄物の取り扱いガイドライン作りなどを行う。
2017.10.31	埼玉新聞	体長18センチの子持ち アユ 伊奈の綾瀬川で初確 認 専門家「近くに産卵場 所」	綾瀬川のアユ調査に取り組んでいる調査チームが29日、伊奈町内の同川で体長18.3センチの子持ちアユを投網で捕まえた。同チームが産卵期のアユを確認したのは初めて。調査を指導した県環境科学国際センター自然環境担当主任専門員の金澤光らは「東京湾から遡上した稚アユがここまで成熟していたことが確認できた」とコメント。
2018. 1.13	朝日新聞	STOPクビアカ サクラを守れ 県と市民団体協力 防除に本腰 手引き提供 説明会も	サクラの木を食い荒らす外来昆虫「クビアカツヤカミキリ」による被害を食い止めようと、県環境科学国際センターが市民団体などの協力を仰いで「STOPクビアカ」作戦に乗り出す。「生息の広域化が懸念される。早期発見が大切」として、サクラの保全活動に取り組む団体などを巻き込む形で防除に本腰を入れる。また、被害実態や防除方法などをまとめた手引きを作成・提供し、説明会を開催する。
2018. 1.13	毎日新聞	外来カミキリで桜被害 県北部中心に相次ぐ 県が実態調査へ	外来昆虫「クビアカツヤカミキリ」がサクラの木を食い荒らす被害が、県北部を中心に相次いでいる。県環境科学国際センターが、昨年7月に、羽生市での被害報告を受け、県内各地のサクラを調べたところ、行田市や加須市など6市で成虫の生息やサクラの被害を確認した。同センターは、市民団体などと協力し実態調査を始める。また、生態や特徴、被害を発見する方法など作成し、説明会も開く。
2018. 1.15	埼玉新聞	外来カミキリ 県内7市で確認 サクラなど枯死の恐れ 県、防除へ本格調査	サクラなど主にバラ科の樹木を食い荒らして枯死させてしまう外来昆虫「クビアカツヤカミキリ」の被害が、行田市や加須市など県北東部に拡大している。県環境科学国際センターでは、「埼玉のサクラを守るため、県民の力を借りながら、被害防止に取り組むたい」と早期発見・防除を呼びかけ、被害防止の手引きも作成・配布している。今後説明会を開き、県民参加による被害調査を今春から開始する。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内容
2018. 1.16	日本経済新聞	観光資源の桜を守れ 県、外来カミキリ防除 作戦 手引作成・実態調査急 ぐ	県環境科学国際センターは、桜や桃などの樹木を食べ、 放置すれば枯死させてしまう「クビアカツヤカミキリ」の被 害防止作戦を展開する。2012年に国内への侵入が見つ かり、県内でも既に7市で確認されている。同センターは、 「日本には桜が多く、天敵もいない。繁殖力が強く、早期 発見、防除が重要」と強調する。被害防止は、手引き作成 による県民への周知、県民参加による調査、桜の保全団 体などへの説明会で展開する。
2018. 1.16	産経新聞	特定外来生物指定 拡大でサクラ危機 「クビアカ」対策に本腰	県内で、15日に特定外来生物に指定された「クビアカツ ヤカミキリ」がサクラやスモモの樹木を浸食しており、被害 拡大が懸念される。同種は繁殖力が高く、対策が遅れる と大量発生する恐れがある。県環境科学国際センター は、対策の周知、県民参加の調査などの被害防止作戦を 開始する。被害防止作戦では、被害防止の手引きを作 成・配布し、説明会も開催する。
2018. 1.17	日本農業新 聞	特定外来生物 クビアカツヤカミキリ 埼玉県で被害拡大 桜やスモモ食害 手引作り防止対策 今春から県民参加実 態調査	環境省が15日に特定外来生物に指定した「クビアカツヤ カミキリ」による被害が、埼玉県内でも広がっている。桜や スモモなどで食害が発生していることから、県環境科学国 際センターは被害防止の手引を作り、今春から県民参加 で実態調査を始め、被害防止に本腰を入れる。2月1日 の幸手市を皮切りに説明会を開き、県北部でも開催する 計画だ。
2018. 1.21	読売新聞	外来カミキリ撲滅へ説 明会 県が来月 桜の管理者などに	桜の木を食い荒らすとして特定外来生物に指定された昆 虫「クビアカツヤカミキリ」の撲滅を目指し、県環境科学国 際センターは来月から、桜の管理者や保全団体などに対 して駆除方法の説明会を行う。調査方法や駆除の仕方を まとめた手引きも作成。同センターは「県民に知識を持っ てもらうことで対策を進めたい」としている。
2018. 1.25	東京新聞	県北部で広がるクビア カツヤカミキリ被害 県が対策本格化 各地で説明会、実態調 査も水際の防止重要	サクラの木を食い荒らす外来昆虫「クビアカツヤカミキリ」 の被害が県北部を中心に広がっている問題で、県が対策 を本格化する。手引の作成や説明会の開催で対処法を 周知し、県民の力を借りた実態調査にも乗り出す。県環 境科学国際センターの担当者は、「繁殖力が強いので、 被害の拡大や広域化が懸念され、水際で防ぐことが重 要。県民と協力して対処したい。」としている。
2018. 2. 6	埼玉新聞	彩の国女性研究者ネッ トワーク 埼大で初セミナー 技術者、学者ら140人 参加	県内の女性研究者・技術者の活躍を推進するため、埼玉 大学と県は「彩の国女性研究者ネットワーク」を立ち上 げ、同大で5日、キックオフセミナーを開催した。連携機関 は同大と県環境科学国際センターなど県の5機関及び民 間5機関で約140人が参加した。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内容
2018. 2.14	読売プレミアム(WEB)	桜を守れ！外来カミキリムシ撃退作戦	桜は観光資源、梅、桃、スモモは農業資源であることから、クビアカツヤカミキリ発生県の一部では独自の撃退作戦が始まった。埼玉県では県環境科学国際センターが主導し、手始めに2月1日、権現堂堤という桜の名所がある同県幸手市で、市役所や桜保存会の関係者ら50人以上を集めて初の説明会を開いた。「被害防止の手引」も県独自に作成した。
2018. 2.19	読売新聞	ソメイヨシノに新害虫クビアカツヤカミキリ高齡化・衰退に追い打ち	日本の春を彩る桜を代表するソメイヨシノに外来種の害虫クビアカツヤカミキリの被害が拡大している。環境省は今年1月、特定外来生物に指定した。埼玉県寄居町で7日、クビアカ対策について、県内自治体職員向けの説明会があった。説明会の参加者は、寄居町に隣接する深谷市の桜並木を視察し、県環境科学国際センターの三輪誠担当部長が被害の様子を説明した。同センターでは、被害防止の手引を作成し、注意を呼びかけている。
2018. 3. 8	埼玉新聞	ムサシトミヨ繁殖を報告熊谷で3小中学校	熊谷市ムサシトミヨをまもる会主催の「ムサシトミヨ繁殖報告会」が熊谷商工会議所で開かれ、約100名が出席した。元荒川に近い市立熊谷東中、同久下小、同佐谷田小の3校が繁殖活動を報告。県環境科学国際センターの金澤光は講評で「昭和60年に日本初の繁殖試験を東中で始めた。水と水草の管理がトミヨの生息数につながる」と3校の取り組みを評価した。
2018. 3.14	夕刊フジ	日本から花見が消える！？桜の木食い荒らす外来カミキリ激増	県環境科学国際センターが提供したクビアカツヤカミキリの写真が掲載された。
2018. 3.22	AFP通信	侵略的外来甲虫が日本の名高い桜の花を脅かしている	日本で桜が開花し始めているが、外来の虫という新たな宿敵に直面している。虫の名前はクビアカツヤカミキリ。その幼虫は、サクラやモモなどの木に寄生し、中身を食いつながら成長する。深刻な場合、木が枯死することもある。県環境科学国際センターの三輪誠氏は、何もしなければ被害が拡大すると述べた。対策として、カミキリムシを薬剤で殺し、激しい寄生を受けた木は他の木を守るため伐採することも必要だとした。
2018. 3.22	チャンネルニュースアジア(シンガポール)	侵略的外来甲虫が日本の名高い桜の花を脅かしている	上記のAFP通信で報じられた内容が引用された。
2018. 3.22	スポーツニク日本	外来種の虫が桜を脅かす	上記のAFP通信で報じられた内容が引用された。
2018. 3.26	レコードチャイナ	日本で花見ができなくなる？！専門家が警鐘を鳴らす理由とは	専門家らが注意を促しているのは桜の木に寄生するクビアカツヤカミキリで、対応措置をとらなければ桜の木を枯らすことになってしまい、将来、花見ができなくなると指摘している。県環境科学国際センターでは被害防止のための手引を作成していることなどを報じている。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内容
2018. 3.31	埼玉新聞	小学生対象に環境学習 外来生物って何だろう？	県環境科学国際センターで、加須市の小学生22人を対象に「環境学習講座」が開かれた。外来生物って何だろうの学習では、同センター自然環境担当の角田裕志さんが外来生物について話をした。

(2) テレビ放映、ラジオ放送

(12回)

放送日	局名	番組名(タイトル)	内容
2017. 5. 6	テレビ埼玉	魅力まるごと いまドキッ！埼玉 (2017GW特別企画 (4/30春の生態園))	県環境科学国際センターでGW特別企画として実施した生態園での春の自然観察会の様子が放映された。また、5月7日に開催される研究所公開などについても紹介された。
2017. 5. 9	TBSテレビ	朝チャン (PM2.5濃度上昇)	関東地域で気温が上昇し、PM2.5濃度も高まった。PM2.5は越境大気汚染だけでなく、太陽の日射によって光化学大気汚染が発生した時も、二次的に粒子が生成することで濃度が高まることを解説した。
2017.10.15	TBSテレビ	うわさの東京マガジン (小鹿野町の水道広域化)	平成の名水百選に選定されている小鹿野町・毘沙門水の水質について紹介した。水の味に関係する有機物の量が非常に少なくおいしい水であること、また、硬度は硬水と軟水の間程度であることを解説した。
2018. 1.16	NHK	首都圏ニュース (埼玉県が外来カミキリ 駆除対策)	環境省が特定外来生物に新たに指定した昆虫「クビアカツヤカミキリ」に、桜の木などが食い荒らされる被害が相次いでいる埼玉県では、駆除の手引を新たに作るなど本格的な駆除対策に乗り出した。対策を進める県環境科学国際センターは「被害の拡大防止には早期発見と対策が重要なので、被害が疑われる木を見つけたら自治体などに連絡してほしい」としている。
2018. 2. 1	NHK	首都圏ニュース (カミキリから桜の木を守る講習会)	桜の名所として知られる埼玉県幸手市で、桜の木などを食い荒らす特定外来生物の「クビアカツヤカミキリ」の被害を防ぐ講習会が開かれた。講習会では、埼玉県の研究員が、幼虫のいる木の見極め方などについて説明した。主催した県環境科学国際センターの三輪誠担当部長は、「被害を確認したら市町村の環境担当の窓口ですぐに知らせてほしい」と話していた。
2018. 2. 1	テレビ埼玉	イブニングNEWS (外来害虫“クビアカツヤカミキリ”被害防止説明会)	「権現堂桜堤」で知られる県内有数の桜の名所、幸手市で、桜の木を外来害虫から守るため、保全活動を行う団体向けの説明会が開かれた。説明会では、県環境科学国際センターの担当者が、権現堂桜堤の管理者らに対し、木の中に幼虫がいる痕跡を見分ける方法などについて説明した。
2018. 2. 2	J:COM	デイリーニュース (外来害虫“クビアカツヤカミキリ”被害防止説明会)	県内有数の桜の名所「権現堂桜堤」がある幸手市で、サクラの外来害虫“クビアカツヤカミキリ”の被害防止説明会が県環境科学国際センター主催で開かれ、その内容が紹介された。
2018. 3.13	テレビ朝日	ワイドスクランブル	県環境科学国際センターが提供したクビアカツヤカミキリの写真が番組で利用・放映された。



放送日	局名	番組名(タイトル)	内容
2018. 3.17	フジテレビ	めざましどようび	県環境科学国際センターが提供したクビアカツヤカミキリの写真が番組で利用・放映された。
2018. 3.19	テレビ東京	未来世紀ジパング	県環境科学国際センターが提供したクビアカツヤカミキリの写真が番組で利用・放映された。
2018. 3.20	TBSテレビ	Nスタ	埼玉県深谷市のクビアカツヤカミキリ被害地において、県環境科学国際センターの三輪研究員が、現場の被害状況などについて説明した。
2018. 3.24	TBSテレビ	新・情報7days	県環境科学国際センターが提供したクビアカツヤカミキリの写真が番組で利用・放映された。

(3) ミニコミ誌等

(4回)

掲載日	掲載誌	タイトル	内容
2017. 7. 1	たまログ(浦和版)	夏休み特別企画	夏休み特集で、県環境科学国際センター夏休み特別企画の開催日時や参加方法などを紹介。
2017. 7. 1	たまログ(大宮・上尾版)	サイエンスショー化学反応	8月2日に開催される夏休み特別企画「サイエンスショー化学反応」の開催日時や参加方法などを紹介。
2017.10.20	ちいき新聞 草加南版	大曾根の湿地 ビオトープを守る会 吉兆の証?! 珍しいカメを発見!	大曾根ビオトープで、珍しいカメが発見された。10月22日開催の「やしお市民まつり」で公開予定だ。県環境科学国際センター主任専門員の金澤光によると「昔から緑毛亀、蓑亀と呼ばれ、吉兆の証、不老長寿の象徴として珍重された」とコメント。
2018. 1.29	コープみらい さいたまイン フォメーション	子育て世代のための 環境科学セミナー 埼玉の空気、今と昔は どこが違う?	PM2.5や光化学スモッグなど、空気の汚れは目に見えないだけに子育て世代には気になるもの。そんな空気の汚れについて、県環境科学国際センターの研究員がわかりやすく説明します。